ごあいさつ

盛岡市には、１万年以上前の旧石器時代から現在まで連綿と人々の生活が営まれ、その痕跡は地中に数多く残されています。市内には780カ所以上の遺跡が確認されていますが、半数以上が縄文時代の遺跡です。県指定史跡大館町遺跡や繋遺跡、川目遺跡、柿ノ木平遺跡といった縄文時代の大集落をはじめ、縄文人の生活を支えた狩猟場跡など、数多くの縄文遺跡が発見されています。

１万年続いたといわれる縄文時代の生活や文化を支えた「石」。石は道具として加工され、ときには装身具や祈りの用具に姿を変えて人々の文化や生活を支えていました。

令和３年、１万年以上の間、自然環境に適応した暮しと精神文化を現代に伝える貴重な文化遺産として、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録され、縄文時代への関心が高まっています。今回は、盛岡市内から発見された縄文時代の石製品や関連する遺物を通して縄文人の優れた石材加工について解説します。

最後になりましたが、今回の企画展を開催するにあたりまして、多くの皆様から御協力を頂戴いたしました。ここに、深く感謝の意を表すとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

盛岡市遺跡の学び館
館長　割船　活彦

目　次

ごあいさつ…… 2
凡　　例…… 3
Ⅰ　縄文時代以前の盛岡－石槍を持つ人々－…… 4
Ⅱ　盛岡の縄文文化－土と石の文物－…… 6
　１　縄文時代の幕開け－土器の登場－…… 6
　２　定住の始まり－縄文文化の定着－…… 8
　３　精神文化の開花－石でつくる装飾品－…… 10
　　コラム１　玦状耳飾りの石材「滑石」…… 15
　４　縄文文化の高揚－活発な交流－…… 16
　　コラム２　盛岡のネフライト（軟玉）…… 28
　５　縄文文化の終焉－縄文時代後・晩期の石製品－…… 35
　　コラム３　早池峰のネフライト…… 37

「の」字状石製品
庄ヶ畑Ｂ遺跡出土

開催要項

会期／令和４年10月１日（土）～令和５年１月22日（日）
会場／盛岡市遺跡の学び館　企画展示室
主催／盛岡市遺跡の学び館
後援／（順不同）岩手考古学会、岩手日報社、朝日新聞盛岡総局、読売新聞盛岡支局、毎日新聞盛岡支局、時事通信社盛岡支局、共同通信社盛岡支局、河北新報社、産経新聞社盛岡支局、デーリー東北新聞社、盛岡タイムス社、岩手日日新聞社、ＮＨＫ盛岡放送局、ＩＢＣ岩手放送、テレビ岩手、めんこいテレビ、岩手朝日テレビ、岩手ケーブルテレビジョン、エフエム岩手、ラヂオ・もりおか、情報紙ゆうゆう、アキュート

凡　　例

（１）本書は、令和４年10月１日（土）から令和５年１月22日（日）まで開催する盛岡市遺跡の学び館第20回企画展「盛岡の縄文文化－縄文人の石細工－」の図録である。
（２）本企画展では、盛岡市に寄贈された浅沼孝男収集資料、奥健夫収集資料、武田良夫収集資料、土村裕治収集資料、古澤典夫収集資料を中心に展示、図録作成を行った。
（３）本企画展は館長 割船活彦が総括し、企画・展示は大森勉、菊地幸裕、津嶋知弘、今野公顕、花井正香、鈴木俊輝、今松佑太、杉山一樹、杉浦雄治、室野秀文、佐々木あゆみ、浜谷佑、千葉貴子、伊藤聡子の補助を得て、神原雄一郎、樋下理沙が担当した。
（４）ネフライト（軟玉）など石製品の石材に関しては台湾中央研究院地球科学研究所 飯塚義之、東北歴史博物館 小野章太郎及び神原・樋下が検討を進めており、現段階で得られている知見の範囲で本図録に情報を提示した。
（５）本企画展を開催するにあたり、下記の各機関・各位に多大なる御支援を賜りました。

御指導・御協力（順不同敬称略）

機　関　岩手県教育委員会、大崎市教育委員会、大船渡市立博物館、蔵王町教育委員会、東北歴史博物館、宮古市教育委員会

個　人　相原淳一、市川健夫、小野亜矢、小保内裕之、金子昭彦、菅野智則、菊池強一、小林謙一、小林勢子、佐々木和久、鈴木雅、高木晃、瀧野常實、長岡守、名久井文明、八木勝枝、安原誠

ヒスイ製三角形大珠
川目Ｃ遺跡出土

関連企画

【特別講演会】
講師／東北歴史博物館
　　副主任研究員　小野 章太郎　氏
演題／狩猟採集社会における石の利用
日時／令和４年11月６日（日）14：00～16：00
会場／盛岡市遺跡の学び館　研修室

【企画展解説講演会】
講師／当館　文化財主査　神原 雄一郎
演題／岩手の石材産地踏査記（予定）
日時／令和４年11月６日（日）13：00～14：00
会場／盛岡市遺跡の学び館　研修室

第19図　玦状耳飾り
縄文時代前期～中期
盛岡市内各地　当館蔵

1・2	上平遺跡	5・6	畑井野遺跡
3・7	大館町遺跡	8・9	繋Ⅴ遺跡
4	大豆門遺跡		

第19図は盛岡市内の遺跡から出土した玦状耳飾りである。左右の垂部を連結する上端部が2分割したものが多く、2・3・7・9のように小さな穴を開けて再利用するものも多い。

第20図　岩　偶
縄文時代前期
大豆門遺跡
当館蔵

第21図　土　偶
縄文時代前期
宮古市崎山貝塚　当館蔵

第20図はシルト質凝灰岩製の岩偶で、独特の形状から「肩パット形岩偶」と呼ばれる。青森県や秋田県北部など北東北を中心に分布し、盛岡市では数少ない石製品の一つである。

第21図は岩偶を模した土偶で、頭部？のハ状陰刻や腕部の表現を忠実に模している。

コラム1　玦状耳飾りの石材「滑石」

縄文時代前期から中期にかけて流行する玦状耳飾りであるが、石材には滑石・蛇紋岩・粘板岩・凝灰岩など比較的軟らかい岩石が選ばれ、特に滑石が好まれていたようである。滑石は硬度が低く、人間の爪でも傷が付く鉱物である。加工が容易で、研磨すると光沢を帯び、色調が豊かな滑石は縄文人にとって魅力的な石材だったのであろう。北上川東岸、北上山地沿いの小山遺跡では滑石製石製品だけでなく滑石の原石も持ち込まれている（第13図10）。また、北上山地の東側、宮古市でも滑石製玦状耳飾りや石製品が発見されている。宮古市を流れる閉伊川を遡れば滑石が産出する蛇紋岩分布域に達する（巻末地図参照）。内陸部の縄文人、沿岸部の縄文人は、装飾品が必要な時は互いに北上山地奥深くまで石材を採取しに来たのかもしれない。

盛岡市東部には、「根田茂帯」と呼ばれる地質体が盛岡市松園付近から根田茂付近を経て早池峰山南方にかけて延びる。根田茂帯には海洋性緑色岩（玄武岩）、珪長質凝灰岩、蛇紋岩が見られ、滑石は蛇紋岩に伴うように産出する。蛇紋岩体を貫く破砕帯に、他の岩石と混在した状態で含まれたり、蛇紋岩中に脈状に生成されるなど様々な産出状況がうかがえる。そのような地点は米内川流域から早池峰山南方にかけて点在し、60cm以上の原石が観察される場所もある。しかし、多くは不純物が混入し、加工には不向きなものがほとんどである。製品を作るためには良質（緻密）で製品加工に耐えれる大きさの滑石を得る必要がある。

縄文人達は製品用の石材がある場所を熟知していたのであろう。

1・2	宮古市八木沢野来遺跡
3	宮古市小豆遺跡
4～10	宮古市崎山貝塚

1～8	玦状耳飾り
9	小玉
10	岩版

第22図　滑石製石製品
縄文時代前期～中期
宮古市内各地　当館蔵

第23図　滑石原石
盛岡市砂子沢他
個人蔵

第35図のヒスイ大珠は長さ約9㎝もの穴を縦に貫いた筒状の製品である。垂飾りにするには不便な形状である。第36図のような製品を作るための素材なのかもしれない。

第35図　翡翠大珠（緒締形 筒状）
長さ 8.7cm　幅 3.2cm
厚さ 2.5cm　比重 3.29
川目Ｃ遺跡　縄文時代中期中葉　当館蔵

第36図　ヒスイ小珠（緒締形）
長さ 3.7cm　幅 2.0cm
厚さ 2.3cm　比重 3.29
川目Ｃ遺跡　縄文時代中期中葉　当館蔵

第36図のヒスイ小珠下端に僅かな段が認められる。これは擦切による分割が行われた痕跡で、本来は第35図のような筒状の製品だったことがうかがえる。

約１万年続いたといわれる縄文時代の遺跡から発掘されたヒスイの数は、大雑把に見ても極めて少ない。遺物の出土量が多い中期の遺跡でも発見されるのは稀である。それだけ貴重なヒスイは、当時の重要な立場を持つ人物だけが身に着けていたのだろう。また、そのヒスイは墓と思われる土坑から出土することから、被葬者と共に埋められ、伝世されることもなかったようである。恐らく、多くの縄文人はヒスイを直接見たことがなく、「緑色の貴重な石」の話を伝え聞く程度ではなかったのではないだろうか。

第37図　ヒスイ小珠
長さ 2.6cm　幅 1.9cm
厚さ 0.8cm　比重 3.09
川目Ｃ遺跡　縄文時代中期中葉
当館蔵

第38図の大珠は自然礫を研磨したもので、部分的に自然面が残る。端に打撃を加えたような痕跡があることから、本来は分割して小珠などを製作しようとしたのだろう。第39・40図のように、ヒスイは小さな破片も無駄なく加工されていた。

第38図　ヒスイ大珠（不整形）
長さ 5.1cm　幅 4.4cm
厚さ 2.8cm　比重 3.25
川目Ｃ遺跡　縄文時代中期中葉
当館蔵

第57図　緑色岩製大型磨製石斧
長さ 47.1cm　幅 7.8cm
厚さ 4.2cm　比重 2.96
日戸遺跡　縄文時代前～中期？
当館蔵

第57図は日戸遺跡で発見された大型磨製石斧である。擦切技法で製作されたもので、表・裏の面には擦切の痕跡が残り、一側面にも擦切痕が残る。この巨大な石斧は、原石を縦に擦切分割し、板のような石材を作出する。その板のような石材を更に擦切で分割して、石斧に仕上げている。

石材には玄武岩質の緑色岩が利用され、第56図8の緑色岩に酷似する。

第56図1～4など市内各地の縄文遺跡から出土する緑色岩製磨製石斧と石質が共通することから縄文時代に広く流行した石材なのであろう。

5　縄文文化の終焉　－縄文時代後・晩期の石製品－

縄文時代で最も繁栄を誇った中期の大集落も、新しい時期になるにつれ、集落規模が縮小されていく。大館町遺跡では中期後半より竪穴建物跡が減少し、中期末葉から後期にかけては僅かな数となる。同様の傾向は小山遺跡や川目C遺跡でも認められる。

しかし、周辺に目を向けると、後期の遺跡は決して少ないわけではない。中期のような台地上や丘陵地に集落を展開するのではなく、川や沢に面した微高地や、山間部の緩斜面などに集落が営まれていることが多い。これは、中期の頃とは異なる生活スタイルに変化したからであろう。

生活の変化を物語るのが、実用具である石器の器種である。縄文時代早期から中期まで見られた擦面のある敲石が、後期以降になると姿を消し、代わりに有茎石鏃や磨製石斧が増加してくる。磨製石斧は大小、特に実用とは思えないほどの小型も見られる。

縄文時代中期までの石器を見ると、石材は周辺河川で採取できるような石材を多用していたように見える。しかし、後期以降になると光沢のある珪質頁岩と呼ばれる岩石や、玉髄・碧玉・メノウなど色彩のある岩石が目立つようになる（第59図1～26）。

後期から晩期にかけて、東日本各地で環状列石（かんじょうれつせき）など、祭祀（さいし）等の儀式を思わせる遺構や、数多くの土偶や石製品など、精神的な用途に関係する遺物が多くなる。そのような精神文化が発達するなかで、実用具として製作されていた石器も祭祀等に使う石器へ用途が分化したのかもしれない。

石材加工技術は高度に発達し、特に石を研磨して作る装飾品など石製品の製作は盛んであった。このような石材加工技術は次の時代である弥生時代にも引き継がれ、盛岡周辺では金属器が普及する古墳時代まで続く。

1　縄文時代後期の土器
柿ノ木平遺跡
当館蔵

2　縄文時代晩期の土器
上平遺跡
当館蔵

第58図　縄文時代後・晩期の土器